

平成20年度 教師海外研修 (派遣国：マレーシア) 実践報告書

1. タイトル 私の出会ったマレーシア
2. 氏 名 堀野 亜季
- 学校名 大阪府立長吉高等学校 担当教科 保健体育
3. 実践教科 世界の食文化 (学校設定科目) 時間数 150分
4. 対象生徒 教科選択生徒 対象人数 約20名

5. カリキュラム案

(1) 実践の目的

マレーシアから学んだ「知ることから理解が始まる」→「お互いを認め合うこと」→「違いをこえて共に暮らせる」を3つの大切なステップテーマとし、多文化理解・多文化共生を考える。

(2) 授業の構成案

時限・テーマ	方法・内容	使用教材
1時間目 (50分) テーマ：多民族国家であるマレーシアについて知る ねらい：マレーシアについて学び、「知る」ことから、その特徴である多民族国家についての理解を深める。	<ul style="list-style-type: none"> ・マレーシアの場所・マレーシアに住む人々の特徴を紹介。 ・マレーシアでの発見から感じた気づきについて写真を用いて紹介。 ・いくつもの宗教・言語も共存していることについて考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・プリント (作成した物) ・パワーポイント ・アザーン (音声) ・民族衣装 ・メッカを指すマーク ・アラビア文字
2時間目 (100分) テーマ：文字・食事・ものを通して異文化に触れる。 ねらい：互いの違いを知り、認めることから、互いの理解を深め共	<ul style="list-style-type: none"> ・アラビア文字に挑戦し、多文化について触れ、知る。 ・特に信仰によって食事にも大きな違いがあることを知り、理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・プリント (作成した物) ・アラビア文字表 ・パワーポイント ・マレーシアボックス (バッテリー・楽器・シナモン・赤米) ・民族衣装・制服

生について考える機会とする。	<ul style="list-style-type: none"> ・マレーシアでの発見からの気づきについて考える。 ・ホームステイで得られた物を通して多文化について知り、感じ、考え、共生について考える。 	・マレーシアで購入した食品
3時間目（20分）	・マレーシアの出会いが教えてくれたこと、まとめ。	・プリント（作成した物）

6. 実践授業の詳細

1 限目：マレーシアはどんな国なのか？

日本とマレーシアの位置確認が出来る地図を用いて、場所・気候について紹介、その後大きな特徴である「多民族国家マレーシア」についてそこに住む人々・文字・宗教の特徴を取り上げながら学びを深めた。特に「知る」ということに重点を置き、視覚・聴覚などからのアプローチも取り入れ、触れ・考える機会とした。

【生徒の反応】

初めて知るマレーシアの民族のこと、町の様子、イスラム世界について、新しい発見に素直な反応がみられた。特にイスラームのお祈りについては、自分たちの生活では考えにくいほど短いにない生活習慣であることと、信仰の深さの違いに驚きの声があがっていた。「なぜ5回もお祈りするのかわ？」この素直な疑問に、社会科教諭が回答。その答えに真剣に耳を傾ける姿が印象的であった。

そしてイスラームについて聞いた上でも、まだ自分とは異なる考えに、理解が追いつかない。そのとまどいや違いへの驚きが、生徒たちが感じた大切な気持ちであり知ることの第一歩であっただろう。

2 限目：アラビア文字とは？

アラビア文字で自分の名前を書いてみよう！と、取り組みやすい課題でアラビア文字に触れる。新しい文化に「触れる」ことから「知る」につなげる。文字もコミュニケーションの1つのツールであるという確認。一度でも触れることで知らなかったことから「知っている」に変化させる。

【生徒の反応】

右から左に書くという初めての発見にも新鮮な反応を見せていた。なにより、自分の名前をアラビア文字にするという挑戦では、課題として取り組みやすかったため、ていねいに一生懸命取り組み、色づけをするなど興味深く取り組んでいた。

食文化を通じた多文化理解

食文化について、自身の食文化との比較も加えながら、信仰等の特徴による食文化につい

て紹介する。また、一緒に食事は出来ないのか？友達にはなれないのか？などの疑問を提示し、多文化を認めていく事について考える機会を設けた。

【生徒の反応】

信仰によって大きく異なる食文化を知り、驚いた様子であった。食べれない理由を知ることによって相手を理解し、それを理解しているからこそ思いやった行動ができることへの理解が深まった様子であった。

唐突な発言ではあったが「戦争がおこるやん！」という発言にも、理解すればそれは防いでいけるし、腹が立つ気持ちも持ちにくい。食文化の違いを例に挙げて伝えると納得という理解を示していた。また、学校内の友達でも食文化の違う仲間がいる。けれど友達でいれるよ。ということを笑顔の写真を見ながら話をした時、知り、理解することから文化が違って友達になれることをつかんでくれた様子であった。

ホームステイからの学びについて

生活そのものが異なる中で得られた学びについて考える。マレーシアボックスを用いて、物を通じた多文化の発見とそこから理解を深める。

村の生活の不便さ、現在の生活のすばらしさを確認に行ったのではないという観点を事前に伝え、必ずある違いについて知ることの大切さ、そこから互いの違いを理解する事の必要性と学びを課題とした。ホームステイではこれらを実際に体で心で感じれる大切な時間であったことを経験から話をした。また、私の経験を通して、私自身が感じたこと、発見したことを生徒の学びにつなげるようにした。

マレーシアボックスではクイズ形式を用いて生徒の興味関心を引きつけ、「何？」という疑問から、知るにつなげた。

【生徒の反応】

「I ni Apa？」クイズは反応がよく、何であるのかを考えだし、答えていた。興味を持つことができ「知りたい」につながっていたようである。マンディの説明では「なぜ家の中で出来ないのか？」など自分たちの生活では当たり前と考えていたことと違う生活習慣にとまどいを見せていたが、違いを理解しようとする「なぜ？」という疑問に積極的に向かっていた。

まとめ

マレーシアが教えてくれたこと

☆知ることから理解が始まる

☆お互いを認め合うこと

☆違いをこえてともにくらせる

この3つのステップこそ、この研修での私自身の学びであり、必要なことである生徒と共に考える機会とした。文化を越えた人のつながりのみならず、すぐ隣の仲間さえこの心が大切であり、相手を知り、理解することこそ、共に暮らすために大切なことであると

考える（ドリアンのお菓子里に挑戦した。）

【生徒の反応】

まとめでは、この授業を通してのテーマを生徒たちそれぞれの段階に応じて理解しようという姿勢が見られたように思う。

お菓子里を食べたときは、美味しくないと感じた生徒が多かったようだが、そのことを「まぜい・へん・なにこれ？」と言う反応ではなくこれをマレーシアでは美味しいといって食べるのか？自分では無理だけど・・・などという相手を思いやった態度が取れていた点に今回の2回の授業の思いも少し伝わったのではないかと感じた。

7. 授業後の生徒の感想（一番印象に残ったこと／感想）

- ・マレーシアのことが色々聞けて楽しかった。『知ることで理解が始まる』という言葉が良い言葉やった。
- ・文化が違って仲良しと言うことが印象に残っている。
言葉がわからなくてもコミュニケーションがとれるんや！と思った。私も行きたい。外国の文化ももっと知りたいです。ドリアン自体を食べてみたかった。
- ・やっぱり他国の文化っておもしろい。マレーシアのこと少しだけ知れた。
スナック菓子里は初めて食べた味。お互いを知ることによって理解するのは、とても良いことだと思いました。お互いが知らなかったら大変だから知ること大切だと思います。マレーシアはすごく楽しそうだった。自然のなかではしゃぐ様子を感じた。
- ・知らない文化が知れてよかった。知ることで理解が始まるというテーマで先生が話してくれたけど、マレーシアの文化を知って理解できたし、自分の国である日本のことを相手に説明するのに、もっと日本の文化も知ることができるというのも「ああそうか」と思った。また世界が広がったと思う。
- ・マレーシアは日本と違ってすごい特徴があるんだと思った。少しマレーシアのことがわかった。マレーシアに行ったことがないけど、少し行ってみたいと思った！！でも今日の授業すごい楽しかった！！
- ・マレーシアの人はお互いのことを知って理解することを当たり前に行っているんだということが印象に残った。
- ・マレーシアのことを色々知れて楽しい時間でした。マレーシアの人々が“当たり前”にできている、知って理解することを私もできるようになりたいです。
知って理解して、認め合って、そういう簡単なことから1つずつしていくことで、いろんな人と仲良くなって、一緒に暮らしていけるんだなってそう思った。
- ・マレーシアの文化を知るだけじゃなくて、人間関係でも大切なことを学べた授業でした。色々勉強になってよかった。お互いを知り認めあえば違いをこえて共に暮らせるというのを知れてよかった。楽器がすごいと印象に残っている。
- ・人それぞれ違いがあるように、世界にもそれぞれの文化がある。
- ・マレーシアの食べ物を食べたい。
- ・先生にもらったお菓子里を食べたけど、舌にずっと残って強烈でした。けど、まずくなかつ

たです。

- ・マレーシアのことを考えたことも無かったので学べて楽しかったです。言葉も知らなかったけど先生がボール1つで笑顔が広がるってゆうのは凄いなって思いました。ドリアンのお菓子はちょっと苦手な感じですね。にんにくとネギのMIX菓子みたいな・・・笑 でもこれに向かう人は普通に食べてるって思ったら、食の文化って凄いなって思いました。まずは分かり合えることが一番やなと思いました。
- ・シナモンが木の皮やったこと。驚いて印象深かった。
- ・サロンを巻いて水浴びしてみたい。
- ・日本と違うことがいっぱい楽しかった。
- ・1回行ってみて、いろんな事をしてみたい、見てみたいしたいなと思った。相手をちゃんと知ることによって言葉が通じなくても色々楽しく出来るんだと思った。
- ・知ることが大事だなと思った。
- ・自分たちとぜんぜん違うから楽しかった。
- ・アラビア文字では右から左に書くことが印層的だった。
- ・まとめが一番印にのこっている。
食べ物をみたいし、日本のものを色々もって行って教えてあげたい。
- ・先生たちが服とか着てやってくれて楽しかったしいっぱい知れた。
「知ることによって理解が始まる」は自分が社会に出たときも必要なことやと思った。否定から入るんじゃなく、まずは知って理解する！

8. 実践授業後の反省・改善点・発見

私自身、授業準備をしていく中でマレーシア研修の整理、再確認、さらなる課題の発見につながられた。また、自分が感じたことの意味などを振り返ることが出来た。しかし、伝えたい、これも入れた方が良いのではという気持ちの中で、生徒が十分に感じ・考える時間を作ることが出来なかった点が一番の反省点である。

「多文化共生」をテーマに“知ることから始まる”にこだわり授業を組み立てて行った。特に自分自身が感じ発見したことは生徒へ伝えるときも具体的に感じた内容として伝えることが出来たように思う。しかし、授業を150分で構成していく中で、生徒自身が行動し、感じて欲しいと考え取り入れたIni Apaクイズでは、時間もなかったただの答え探しとなってしまった部分も多い。答えだけでなく実際に触れ、そこからの学びを大切にすることが必要であったと反省している。食文化の導入では、身近なものとしてとらえ、考えて欲しいという思いから、生徒の食事について取り上げたが、そこから文化の違う食生活への導入としては不十分であったと考えられた。

本校の現状はマレーシアでの現状から学べることも多くあることを再度確認できた。また、生徒へは多文化理解という少し堅苦しい感じではなく、「私がこう感じた」という切り口から、生徒の目線に近い感覚で、また身近な課題とリンクさせながら話を出来た点では生徒の垣根を高くすることはなかったように感じた。授業は事前より考えていたように、生徒と共に作り上げ共に感じるという目標であったが、内容をもう少し絞るなど考えることを大切にす

出会いと発見の
カンポン生活

カンポンとは・・・ ① 山では子ども達が先生!! という意味です。

山にあるものは子ども達の遊ぶのも
の!! お腹がすいたらフルーツの木に登
って食べる。あっぱれ!!

ホームステイ先の紹介!
「ドゥン族」
慣習している祭典
キリスト教

マレーシアは色々と驚かされましたが、マレー半島とボルネオ島の二つから成ります。
マレーシアの首都、クアラルンプールとホームステイしたカンポンは、別にマレーシアでも
異なることばかりです。異文化が溢れる。これはマレーシアの特徴ですが、近代化が進むマレーシア
では都市と郊外の生活で大きな違いが出てきているのも事実です。日本でもこれは同じことが
見える部分も多々ありますね。

ツインタワー

村の家

私たちの生活がいかに「便利か」(便利か)な
んて確かめたいではない!!

日本とマレーシアってどうですか。私たちは今の生活に慣れてしまっているのですから、違う文
化の中で、また、私たちが当たり前に行っていることが異なる!! そうなれば、これを平
静と感じたり、すでになじみやすくなることは、②

しかし決して、どちらかが優れていると、互いの異なる文化を、生活習慣であるというこ
とを③ が大切で、④ から始まるのです。

そして、この異なる文化の中から⑤ が絶対にあるのだと今回のカン
ポンを通過して確認しました。

チャレンジクイズ☆
Ini apa?(イニアバ) ⑥ という意味。
自分の答え ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

⑮

⑯

⑰

⑲

⑳

㉑

㉒

㉓

㉔

㉕

㉖

㉗

㉘

㉙

㉚

㉛

㉜

㉝

㉞

㉟

㊱

㊲

㊳

㊴

㊵

㊶

㊷

㊸

㊹

㊺

㊻

㊼

㊽

㊾

㊿

私たちの生活がいかに「便利か」(便利か)な
んて確かめたいではない!!

日本とマレーシアってどうですか。私たちは今の生活に慣れてしまっているのですから、違う文
化の中で、また、私たちが当たり前に行っていることが異なる!! そうなれば、これを平
静と感じたり、すでになじみやすくなることは、②

しかし決して、どちらかが優れていると、互いの異なる文化を、生活習慣であるというこ
とを③ が大切で、④ から始まるのです。

そして、この異なる文化の中から⑤ が絶対にあるのだと今回のカン
ポンを通過して確認しました。

チャレンジクイズ☆
Ini apa?(イニアバ) ⑥ という意味。
自分の答え ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

タイトル 「今私にできること」

- 3. 実践教科 特別活動 文化フェスティバル
- 4. 対象生徒 実行委員生徒 8名 文化フェスティバル参加生徒全員
- 5. 実践の目的

「今私にできること」をテーマとして取り上げ、マレーシアで感じたこと、学んだことを発信することを目的とした。そこから、少しでも知って欲しい、そして感じて欲しい、そして考えて欲しい、今私たちに出来ることは?!につなげる機会とする。

6. 実践授業の詳細

マレーシア研修で感じたことを発信

実行委員の生徒・有志教員と共にパネルの作成。出会いをテーマとしたの写真を中心に紹介パネル1枚、疑問や課題を投げかけるためのパネル2枚を展示。また、文化フェスティバルではパネルをみた人たちへの「今私に出来ること」メッセージをカードに記入してもらい、100人の今私に出来ることボードを作成。見るのみではなく、参加出来るよう取り組んだ。

今私にできることの1つとして、本校の特色である文化フェスティバルでの24時間マラソンとの共催としてTシャツの販売を行い、その収益を寄付金とした活動も行った。



※Tシャツ販売の時に配布したプリントです。

今私に出来ること?! CAN DO NOW

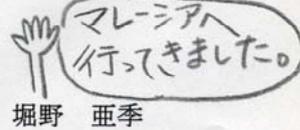
24時間マラソン 共催

Tシャツご購入有難うございます!

この度はこんな無計画で突然の呼びかけにも関わらず、先生方のあたたかいご協力の下、事前販売が123枚という驚異的な売り上げに達しました。本当にご購入・ご協力有難うございました。

このTシャツ販売での収益は24時間マラソンの募金とさせていただきます。勝手な価格設定等もありますがお許し下さい。

私の出会ったマレーシア ~JICA教師海外研修に参加して~



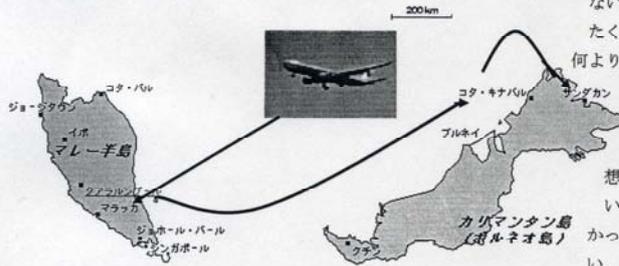
堀野 亜季

まだまだ整理もできていませんが、今回この突然の企画を実行するに至った経過を、この機会に少し書かせて頂きたいと思います。ご存じの方も多いと思いますが、夏休み中の8月4日から8月14日までの10日間、JICAが主催する教師海外研修に参加させて頂きました。10日間多くの先生にもご迷惑おかけし、ご協力いただき参加できました。ありがとうございました。

マレーシアでは「持続可能な開発について考える」というテーマのもと、開発教育・環境問題・多文化共生・・・を重点的に考えるプログラムで活動してきました。聞くだけで?となってしまうようなテーマに戸惑いや不安もありました。このテーマを耳にして・・・体育なのに?堀野が?と思われた先生も多いかと思います(笑) 実際盛りだくさんのプログラムに初めて見るもの・聞くことばかり、何より慣れない英語(笑) 一雰囲気でごまかしながら・・・

しかし・・・言葉がだめならその他のコミュニケーション!! やるしかない!! 楽しんでしまえ!! なんでもチャレンジ!! 堅苦しく考えるのではなく、手で触れ、肌で感じ、心で聞く、そんな充実した10日間を過ごすことができました。

クアラランプールから始まり、コタキナバル・サンダカン。その後ケニンガウに入りホームスティのウルパンガス(水道も電気もない村。何もかも初体験!!)。



たくさんの方々と、素晴らしい出会いにあふれたマレーシア! 何よりもどんな環境の中でもマレーシアで出会った人々の笑顔が輝いていました。例えば学校の生徒たち、市内でカメラを向けた人々、ゴミ山と呼ばれるゴミ処理場に住居を持つ人、そしてその子ども達。日本の私たちから見れば、想像も出来ない生活の中でも、子ども達は笑顔にあふれ、輝いていました。そんな彼らとの出会いは、私にとって知らなかったことへの気づき、それからの疑問、そしてさまざまな思い、そして葛藤・・・何より、今私に何が出来るのか、何をすべきか。この自身へのなげかけに、マレーシアにいる間も、帰国後も、今でも答えは出ないままです。



今回の研修で何を求められているのか、何をしなくてはいけないのか・・・何をしたいのか? そんなことばかり思い悩み、焦る中・・・「しなくては」ではなく、自分に今できること? したいこと。それが正解かどうか分からないし、今回の研修の目的としてつながっているのかどうか分からない・・・けれど何かしてみたい。やってみないとわからない。しかもやるのであれば楽しんでしまえ!! そう思うと想像はふくらみ、私の今の疑問を生徒にも一緒に考えてもらおう!! このテーマで文化祭を取り組んでみよう・・・よしまずはTシャツをつくろう!! 先生方の力も借りたい!! 先生も楽しんでしまえ!! これが今できることの一つになればいいのでは!! という事でこの企画を急浮上させたのです。

これが、今回の研修と直結にはまだまだならないのですが、何かしたい、何が出来るのか? このような思いに至った気持ちを形にしたいと思いました。(そして義務がある実践報告の1つにしてしまおうと・・・も企む・・・) そして突っ走り出したわけですが・・・今回この企画にご協力頂いた先生方にもぜひ、何が出来るのか? この私の疑問と一緒に考えて頂ければと甘えております。先生方の技や経験を活かし、アドバイスよろしく願います。また、活用できるものがあればどしどし使って下さい。そして・・・この研修を学校で活かすと言うことが私の責務となっております。今後他教科の先生ともコラボさせていただき、授業で実践させて頂く予定です。逃げ出したい思いですが、何とか形にしようと考えております。

【生徒の反応】

実行委員生は理解が十分とは言えない中でも、今私に出来ることがこれだという気持ちで、取り組んでくれていた。準備活動を通して出た疑問などを素直に表現してくれていた。また、誰かのためにとということも大切なことだが、その活動をとおして自分たちが楽しむことを実践していた。

文化フェスティバル当日は、展示の前で熱心にみる生徒も多くいて、「こんな感じの写真中学校でもみたことある。」「テレビでみたことある。」「同じような現状を知ってる。」と、特にゴミ処理場の写真では手を止めている様子もあった。「なぜ?」という疑問の声を聞くこともあった。また、「何しに行ったの?」と聞く生徒も多くいて、そこからこの研修でのことを話す機会も得られた。

100人の今私に出来ることでは、展示の発信だけではまだまだ伝わりにくい状況ではあったが、それぞれの思いを書いていた。内容としては簡単なものが多かったが参加しているという気持ちは持っていたように感じた。



←100人分のメッセージから
できあがった絵。

7. 実践授業後の反省・改善点・発見

十分に準備の時間もとれないまま、実行委員の生徒たちにも丁寧に思いを伝えきれなかったのが反省点である。しかし、取り組む中で生徒からの素直な疑問に答えたり、一緒に考えていくことで、また、周りの先生方からのアドバイスや強いサポートをいただけたことが、まだまだ消化しきれていなかった多くの研修から感じたことの整理、発見、考えることにつながる大切な機会となった。

Tシャツ販売など、教員・生徒・保護者を含め多くの方々が賛同して下さり、今回の研修で感じたことの発信のチャンスをいただき大切な場所になったのだが、その機会を全て生かし切れなかったのが改善点であり今後の課題である。しかし、知り、感じる動機付けとしてこの文化フェスティバルの活動は授業とはまた違う大切な役割を果たせたと感じている。

3. 実践教科 現代社会 時間数100分中20分 導入にて2回

4. 対象生徒・教科選択生徒(入学年次～卒業年次まで) 対象人数 約20名

5. カリキュラム案

(1) 実践の目的

環境問題をオランウータンのリハビリセンターをとおして考える

(2) 授業の構成案

時限・テーマ	方法・内容	使用教材
導入 約 20 分 テーマ： ●マレーシアについて ●セピロックオランウータンリハビリテーションセンターに行き、感じたこと ねらい：実際マレーシアに行き、感じてきたこと、セピロックに行き感じたこと、学んだことを伝え、興味関心を高め、環境教育への導入・意識付けを行う	・マレーシアの場所・マレーシアに住む人々の特徴を紹介。 ・マレーシアでの発見から感じた気づきについて写真を用いて紹介。 ・セピロック、動物園での写真を題材に話をする。 例：オランウータンが渡ってきている白い綱のようなものは何？→消防ホース（日本からも送られてきている）なぜホースを使うの？など	・パワーポイント ・民族衣装 ・オランウータン人形 ・セピロックパンフレット

実践授業の詳細

マレーシアはどんな国なのか？ なぜいったのか？

日本とマレーシアの位置確認が出来る地図を用いて、場所・気候について紹介。

簡単にいった動機を説明。

セピロックオランウータンリハビリテーションセンターについて

セピロックオランウータンリハビリテーションセンターの役割を簡単に説明。

写真を見せながら、決まった時間に御飯を食べに帰ってくるオランウータンがいることや、子どものオランウータンが森に出て行くまでのことに少し触れる。また、動物園の写真も同時に見せ、消防ホースが使われていることを生徒へ質問しながら説明をした。

動物園では浅めの堀に水がたまっているだけで檻や高い柵で囲まれていなかった。これはオランウータンが歩いて渡ることがないということも意味していることから、木が少しでもなくなれば行動の範囲が絞られてしまうことがあるということの説明とした。

環境の問題に取り組むにあたり、プランテーションやパーム油は特にマレーシアでは様々な方向から思いや意見を聞く機会があった。その意見は相反することも多くあり、答えは一方向で考えるのではなく、その原因や課題についても様々な視点を持ち判断していく必要があると感じた。だからこそ生徒たちに、その後オランウータンを中心として環境破壊について考える授業を受ける上で様々な視点があることも知り、考えていって欲しいということ伝えバトンタッチした。

【生徒の反応】

消防ホースが使われているという点に関心が高かった。そこを切り口に森の木々のことに触れたため理解しやすい部分があったようで素直な反応であった。